

リアルドリーム文庫

恥辱の地 美しき牝奴隷たち



早瀬真人

挿絵 / 猫丸

試し読み版



Contents

目次

プロローグ	4
第一章	委員長の密かな愉しみ	8
第二章	思いがけない秘密の関係	52
第三章	美少女のいたいけな恥芯	92
第四章	美人教師の熟れた肉体	140
第五章	果てしなく続く性の宴	213
エピローグ	277

登場人物

Characters

日南 環奈

(ひなみ かな)

盟邦学園のマドンナ。艶やかなロングヘアが目を引くアイドル並みの美少女で、男子生徒の憧れの的。淑やかで性格もおとなしく、美貴子を尊敬している。美術部所属。

磯山 知絵

(いそやま ちえ)

真面目でおとなしく、地味なタイプのクラス委員長。性的好奇心は人一倍強く、S男とM女のエロ同人誌を描くことが趣味。美術部の部長。

藤倉 美貴子

(ふじくら みきこ)

盟邦学園美術部の顧問を務める二十六歳の女教師。大人っぽくて色っぽい豊満女性。教育熱心だが気が強く、大の男嫌い。

真淵 浩太

(まぶち こうた)

盟邦学園に通う二年生。根暗で内気な劣等生で、多くの女子はおろか、教師である美貴子にも毛嫌いされている。環奈目的で美術部に所属。



第一章 委員長の密かな愉しみ

1

もともと女子校だった盟邦学園は、生徒数の減少に伴い、五年前から共学校へと生まれ変わった。

文化系より体育会系の活動が盛んな学校で、女生徒の数は男子生徒のおよそ五倍。男にとっては最高の環境と思いきや、勉強もスポーツも女子のほうが優秀で、男子生徒は肩身の狭い思いをする風潮が漂っていた。

特に浩太は学園創立以来の劣等生らしく、根暗で内気な性格がたたってか、毛嫌いしている女子が何人もいることはわかっていた。

今にして思えば、入学早々の大失態が悔やまれる。

その日、浩太は通学の途中で腹痛を起こし、登校してからすぐさまトイレに向かった。男子トイレは女子トイレよりも設置数が少なく、しかも校舎の端にある。

我慢の限界を迎えていた浩太は、いちばん近くの女子トイレで用を足してしまい、

出てくるところをクラスメートの女子生徒に目撃されてしまったのだ。

美貴子にはあとから事情を説明したものの、ひどい叱責を受け、女子たちからは完全に変態少年のレッテルを貼られてしまった。

無視だけならまだしも、ことあるごとに辛辣な言葉を投げかけられ、一年以上にわたっていじめに近い扱いを受けつづけてきたのである。

一年から二年への進級はクラス替えがなく、男の友人は一人もできないまま。担任の美貴子すら、冷淡な対応に終始していた。

となりのクラスの美少女、環奈の存在がなければ、登校拒否になっていたかもしれない。

彼女を初めて目にしたときは、どれほど胸がときめいたか。

艶のある黒髪のロングヘア、ぱっちりした目、小さな鼻、バラのつぼみのような唇。アイドル並みの類い希なるルックスに、鳥肌が立ったほどだった。

彼女に近づきたい、学園生活を少しでも楽しいものになりたい。

浩太は帰宅部に終止符を打ち、この春から彼女が所属する美術部に入部したのだが、現実はそう甘くはなかった。

劣等生の悪い噂は他のクラスにも知れ渡っており、必要最低限の会話以外、環奈が

口をきく機会は一度もなかったのである。

加えて、ある出来事が少年を奈落の底に突き落とした。

入部してから一週間も経たない頃。環奈のクラスの前を通りかかった浩太は、教室内から洩れてきた女生徒たちの会話に足を止めた。

「あの変態男、美術部に入部したんだって？ ひよつとして、環奈目当てなんじゃない？」

「やめてよお、それでなくても憂鬱なのに。考えただけで、ゾツとしちゃう。あーあ、美術部、辞めちゃおうかな」

彼女が放った言葉は一言一句、今でも耳にこびりついている。

美しい少女は心もきれいだという淡い望みは、無残にも打ち砕かれた。

かわいさ余って憎さ百倍。心のよりどころを失った浩太は、日ごとに憎悪の炎を燃やしていった。

環奈はもちろん、女という生き物すべてに対し……。

五月下旬のある放課後、朝に遅刻をしたことで美貴子から激しい叱責を受けた浩太は、爆発寸前の気持ちを押し殺して職員室をあとにした。

くそっ、遅刻なんて、俺以外の生徒もしてるのに！ いっそのこと、レイプでもし

てやろうかつ！)

鬱憤を晴らしたくても、度胸もなければ、そのとっかかりもない。

夢の中では、環奈も美貴子も絶対の服従者であり、何度も淫らな行為を繰り返しているのに……。

今宵は、また妄想の中で二人を犯すことになるのか。

股間の逸物をムズムズさせながら教室に戻る途中、童貞少年は美術室の横を通りすぎたところで眉を顰めた。

(……ん?)

後方の扉が微かに開いており、一人の女生徒の背中が目に入る。

美術部の活動は週に二回、火曜日と金曜日に行われるのだが、絵を描きたい部員は部活のない日でも美術室の出入りが可能だった。

ひよつとして、環奈だろうか。

扉の隙間から室内を覗いた直後、浩太は不満げに舌打ちした。

後ろ髪は肩のあたりまでしかなく、ロングヘアの美少女とは明らかに違う。紛れもなく、同じクラスの委員長で美術部の部長でもある知絵だった。

メガネをかけた優等生はイメージどおり、真面目でおとなしく、無口で地味なキャ

ラクターだった。

浩太に対してバカにした態度こそ見せなかったが、彼女とも込み入った会話を交わしたことは一度もなく、何を考えているのか、さっぱりわからない。

特別仲のいい友人がいるわけでもなく、休み時間はいつも一人で本を読んでいるという印象しかない女生徒だった。

おかつぱに近いショートボブに、黒縁のビン底メガネを見れば、お堅い性格がよくわかる。暗いオーラは自分に通ずるものがあり、浩太は彼女に対して同族嫌悪に近い感情を抱いていた。

(部活の日でもないのに、ご苦労なこった)

嘲笑しながら、何気なく絵に目を向ける。次の瞬間、少年はみるみる真顔に変わっていった。

(あ、あれ……あいつ、何をやってんだ?)

イーゼルに立てかけられたキャンバスには、教卓の上に置かれた花瓶が描かれているが、右下にノートらしきものが見える。

知絵は脇目も振らず、鉛筆でノートに何かを描きこんでいた。

目を凝らし、二・〇の視力を駆使して注視する。

(どうも……マンガを描いてるみたいだな。ひょっとして、腐女子?)

腐女子とは、男性同士の恋愛を扱った小説や漫画などを好む女性の呼称である。

二〇〇五年頃から一般にも認知されるようになったが、オタクとしてのネガティブなイメージが完全に消え失せたとは言えない。

(お堅い性格の委員長が、こそこそとボーイラブを描いてるなんて。やつぱり、恥ずかしいんだろうな。ちよつと、からかってやろうか)

にんまりした浩太は扉をそつと開け、忍び足で近づいていった。

優等生は執筆に夢中になっているのか、こちらの気配に気づかない。

距離を縮めるにつれ、少年の目は驚きに見開いていった。

(ボ、ボーイラブじゃない。こ、これって……)

どこからどう見ても、完全なるエロ漫画だった。

縄で縛られた一人の少女が全裸の状態で大股を開き、美少年に男根を無理やり啜えさせられている。

絵は抜群にうまく、迫力に満ち溢れ、イラマチオのえげつない描写にはただ呆気に取られるばかりだった。

「たつぷりとしゃぶれ」「ザーメンを大量にぶっかけてやる。残さずに飲むんだぞ」

というネームが瞳に飛びこみ、浩太は胸を妖しくざわつかせた。

ヒロインのモデルは、自分自身だろうか。おかつぱ頭の少女は、陵辱を受けながらも恍惚に顔を歪ませている。

（こいつ……マゾなのか？ そう言えば、委員長はいいところのお嬢様で、母親は盟邦学園のPTA会長をしているんだっけ）

教育熱心な親がそばにいる自宅でエロ漫画を描くわけにはいかず、仕方なく放課後の美術室で執筆活動に専念していたのだろう。

（これは……思わぬチャンスかも）

目をぎらつかせた浩太は、脳みそをフル回転させた。

これまで想像の世界でしか実現できなかった蛮行が、にわかには現性を帯びていく。童貞少年はさらに近づき、背後からノートを素早く取りあげた。

「あっ!？」

小さな悲鳴とともに、知絵が驚愕の表情で振り返る。

「へえ、委員長、こんなの描いてんだ」

「か、返して!」

「いいから、見せろよ」

椅子から立ちあがる少女に背を向け、ノートをパラパラと捲れば、男と女のどきつい痴態がこれでもかと描かれていた。

秘園を指でもてあそばれつつ、クンニリングスをされているシーン。女芯にバイブレーターを突っこまれたり、結合している描写まである。

(す、すっげえ……おマ○コの形状まで、しっかり描きこんである)

ルックスの善し悪しにかかわらず、女子高生がえげつないエロ漫画を描いているという事実には浩太は異様なほど昂奮した。

熱い血流が下腹部になだれ込み、ズボンの下のペニスがむっくりと頭をもたげる。肩越しに様子をうかがえば、知絵の顔は茹でダコさながら真っ赤に染まっていた。よほど恥ずかしいのか、俯き加減で下唇を噛みしめている。

「驚いたなあ。真面目な委員長に、こんな趣味があつたなんて」

薄ら笑いを浮かべ、からかいの言葉を投げかければ、少女は口をへの字に曲げた。

「安心しろよ。誰にも言ったりしないから」

「か……返して」

知絵はまったく顔を上げない。か細い声をかろうじて発するも、華奢な肩を小刻みに震わせるばかりだ。

「しばらくのあいだ、これは預かつとくよ。じっくり見たいからさ」

「そ、そんな……」

「あつと、そうそう。俺、用事があつて来たんだ」

少女の弱みを握つてから、浩太は平然と言い放つた。

「夏休みの初日から、三泊四日の合宿に行くだろ？ 場所はもう決まってるの？」

「……うん、去年と同じ。O海岸になると思う」

「宿泊場所は？」

「……海沿いの民宿」

「あのさ、T高原に変更しない？ 委員長のほうから、美貴子先生に提案してくれないかな？」

「え？」

「実は、俺の親父が不動産屋を経営していて、あの一帯の貸別荘を管理してるんだ。合宿の話をしたら、その時期なら空いている物件があるし、安く貸してあげられるって言われてさ」

知絵は何も答えず、ただ困惑げな顔をしている。

浩太は息もつかせず、別荘地のメリットを並べたてた。

「T高原なら、ここから車で一時間ほどだし、近いだろ？ 景色は抜群だし、写生するのに問題はないはずだよ。それに親父に頼めば、すごい大きな別荘が借りられるからさ。ねっ？」

美少女と女教師の陵辱計画は、父に合宿の話をしたときから思い描いていた。

新入部員である浩太の一存で合宿場所を変更するのは不可能だったが、部長の知絵が協力してくれるなら……。

よこしまな思いを悟られぬよう、真剣な表情で訴えるも、少女はなかなか首を縦に振らない。

合宿場所の指定が叶わなければ、計画そのものが水泡に帰すのだ。

(いざとなったら、エロ漫画を盾に脅迫してでも従わせてやる)

覚悟を決めた直後、知絵はあえかな唇をこわごわ開いた。

「……返してくれる？」

「へ？」

「合宿場所を変更したら、同人誌を返してくれる？」

「あ、ああ、これ同人誌なのか。もちろんだよ」

「合宿先の取り決めは、部長の私に任されているの。だから、何も問題ないと思う」

「そうか。じゃ、俺も家に帰ったら、さっそく親父に相談してみるよ。それと、合宿先の変更はあくまで委員長の一存で決めたことにしてくれよな」

「ど、どうして？」

「先生も環奈ちゃんも、俺を毛嫌いしてるだろ？」

「そんなこと……ないと思うけど」

「心にもないこと言うなよ！ お前だって、わかってんだろ？ 俺から勧められたなんて知ったら、間違いなく拒絶するに決まってるんだからさ」

クラス内における浩太への迫害を思いだしたのか、知絵は複雑な表情で黙りこむ。そしてコクリと頷き、小さな声で答えた。

「……わかった」

ついに第一関門を突破し、昂奮のあまり足が震えてしまう。

様々なアイデアが脳裏をよぎったものの、気弱な童貞の自分に大それた行為を遂行するだけの度量があるのだろうか。

異性とはキスどころか交際経験すらなく、陵辱ビデオを鑑賞しながら妄想の世界で欲望を発散することしかできなかつたのである。

本音を言えば、退学になるのは怖い。

父親に知られたら、勘当を言い渡される可能性もある。

環奈だけならまだしも、美貴子に関しては、本気でケンカしても負けてしまうのではないかと思うほど体格がいい。

恐怖と不安を募らせる一方で、邪悪なエネルギーはとどまることを知らずに内からほとばしった。

獣じみた視線が、目の前の少女に向けられる。

小柄ながらも、ふつくらした胸の膨らみが男の本能に火をつけた。

おとなしくて真面目な女生徒は、破廉恥な趣味を知られたことで自己嫌悪に陥っている。今の彼女は弱い立場にあり、反抗的な態度は見せられないはずだ。

(ど、度胸づけに……まずは、この女を練習台代わりにできないか?)

そう考えた瞬間、心臓が早鐘を打ち、ペニスがズボンの下で激しい脈動を打った。

2

根暗な少女に興味はなかったが、知絵が瞬時にしてエロスの塊に見える。

いかがわしい絵を目にした限りでは、彼女も身体の内にも性的な好奇心を潜ませている。

るのだ。しかもマゾヒズムの嗜好があるのなら、多少強引に迫っても拒絶の可能性が低く、誠に好都合ではないか。

「同人誌を描いてることも……誰にも内緒にしてくれる？」

「わかったって。誰にも言わないよ」

緊張を押し殺し、再びノートをパラパラと捲れば、男性器のアップが目にとまる。

女性器は驚くほど緻密に描かれていたが、ペニスに関しては形がいびつでどうにも不自然さを感じた。

「や、み、見ないで」

「い、いや……これ、なんかおかしいぞ」

「え？」

「普通は、こんな形してないよ。ネットを観れば、無修正のチンポがいくらでも出てくるでしょ？」

素朴な疑問をぶつけると、知絵は恥ずかしげに俯いた。

「……観れないの」

「な、なんで？」

「家にあるパソコンは全部、アダルトサイトが閲覧できないように年齢制限がかけら

れてるから」

「あ、ああ、なるほど。フィルター設定か。じゃ、スマホは？」

「スマホも同じ」

やはり知絵は良家の子女で、お嬢様育ちなのだ。

教育熱心な母親の目を盗んでエロ漫画を描いているのは、ストレス発散の意味もあるのかもしれない。

（だからといって……こんな絵を描いてるんだから、根がスケベなのは間違いないよな）

仮に劣悪な家庭環境で生まれ育ったら、どんな女の子になっていたのだろうか。

意味のない想像をした直後、浩太はあるアイデアを閃かせた。

「スケッチブックと鉛筆を持って、こっちに来て」

「え？ な、何を……」

「いいから早くっ！」

妙な期待と昂奮にペニスがひりつく。

準備室に足を向けると、知絵は言われるがままスケッチブックと鉛筆を手に取り、首を傾げてついてきた。

エロ同人誌はよほどの泣き所なのか、逆らう態度はいっさい見せない。それでも準備室に促し、扉をぴっちり閉めると、さすがに不安げな顔に変わった。

室内にはいちばん奥にスチール棚、中央には大きな机と数脚の丸椅子が置かれている。壁際には在校生たちが描いた絵が無造作に立てかけられ、油絵の具の匂いが充満していた。

浩太が入り口のドアを背にしているため、少女は逃げたくても逃げられない。

密室と化した準備室で、浩太はズボンのチャックを引き下ろし、合わせ目の中に手を潜りこませた。

「やっ！」

猛々しい剛直を引っ張りだせば、優等生は慌てて目を背ける。

浩太は心臓をドキドキさせつつ、無理をしてニヒルな表情を装った。

「チンポがどんな形してるか、これならよくわかるだろ。ほら、描けよ。せっかく、見せてやったんだからさ」

ペニスを上下に振りたてても、彼女は決して直視しない。

とはいえ、浩太もあまりの緊張と昂奮で胸が張り裂けそうだった。

校舎の中で、異性に生まれて初めて性器を晒しているのである。

相手がルックスに劣り、特別な感情もない女だからこそ、大胆な行為に走れたのかもしれない。

(それに……エロ同人誌という弱みも握ってるもんな)

困惑顔でうろたえる少女を観察していると、嗜虐心が刺激され、背中がゾクゾクしてしまう。果たして、学園一の優等生はどんな対応を見せるのか。

おどろおどろしい肉茎を眼下に、浩太はお堅い性格の少女を追いたてた。

「貴重な参考資料だぜ。しっかり見ないと、俺も約束は守れないからな」

「そ、そんなっ」

知絵は顔を真正面に向けたものの、ペニスが見界に入ったのか、すぐさま頬を赤らめた。

「せっかくの人の好意を無にしちゃ、だめでしょ。滅多にないチャンスじゃない。さあ、ちゃんとデッサンしてくれよ」

しばし沈黙の時間が流れ、少女がテーブルの下から丸椅子を引っ張りだして腰かける。そして決心がついたのか、唇を引き結んだままスケッチブックを開いた。

知絵との距離は、およそ一メートル。ためらいがちに顔を上げては、画用紙の上に鉛筆を走らせる。

「もう少し近くに寄ろうか？」

「ううん……そこでもいい」

「遠慮すんなよ。本音を言えば、細部まで観察したいんだろ？」

意識的に間合いを詰めれば、優等生は肩をビクリと震わせた。

彼女の様子をうかがっているだけで胸が騒ぎ、股間の逸物がビンビンにしなる。

やがて作家モードに入ったのか、落ち着きのない動作は徐々に消え失せ、顔はほぼ正面を向いたままビクリとも動かなくなった。

（何だよ。恥じらう姿が昂奮するのに……。こんな真剣になられちゃ、ちっとも面白くないや）

浩太は両手を後ろに回し、牡の象徴をこれ見よがしに突きだした。

「……あ」

ペニスを顔の近くまで寄せれば、知絵が上体を起こしてたじろぐ。

前髪と分厚いメガネのせいで表情はわからなかったが、体温が急上昇しているのか、頬が照明の光を反射してテラテラと輝いている。

口の中が渴くのだろう、何度も唾を飲みこんでは胸の膨らみを起伏させていた。

（ククッ……笑っちゃうな。ガリ勉の優等生に、勃起したチンポを見せつけてるんだ

から)

今のこの流れなら、知絵相手に恥辱の限りを尽くせるのではないか。

猛々しい性欲が込みあげるも、やはり童貞はマドンナの環奈に捧げたい。

(委員長が、かわいければ我慢できなかったかも。まあ、いいや、合宿まであと二ヶ月。それまでは、度胸づけの練習台にさせてもらおうから)

浩太の心は、早くも夏合宿へと飛んでいた。

どんな方法で、美少女や女教師を手ごめにしてやろうか。あらゆるアイデアや手段が頭の中を駆け巡り、血湧き肉躍る。

ふと知絵に目を向ければ、少女は一心不乱にペニスをデッサンしていた。

最初は消しゴムで何度も消しては描きなおしていたのだが、屹立した男性器に慣れたのか、妙に落ち着き払っている。

研究者さながら身を乗りだし、はたまた頭を左右に傾け、剛直をじつと観察してはスケッチを繰り返した。

上から覗きこむと、画用紙には様々な角度からのペニスが何本も描かれている。

えらの張ったグランス、裏筋の縫い目、静脈の浮きでた肉胴。写実的で、感嘆の溜め息が出てしまうほどうまかった。

環奈目当てで入部した自分とは、あまりにもレベルが違いすぎる。

(すっげえ……もともと絵の才能があるんだろうな。普通の絵を描けばいいのに、なんでいやらしい漫画なんて描いてるんだ?)

いや、彼女にとつては、エロだからこそ夢中になれるのだ。浩太と同様、優等生の頭の中には淫靡な妄想がたっぷり詰まっているに違いない。

ひたすら感心するなか、天井を睨みつけていた亀頭冠が頭を垂れはじめた。

とたんに知絵は、スケッチする手を止めた。

「……あ」

「おっと、小さくなってきちゃったか。長時間、勃起を維持しつづけるのは、やっぱり無理だな。男は、昂奮しないと勃たない生き物だから」

明らかに不満げな少女に、浩太はほくそ笑みながら嘯いた。

「ど、どうすれば……」

「大きくさせる方法ぐらい、知ってるでしょ?」

知絵はきよとんとしたあと、小首を傾げる。

優等生のお嬢様は、よほどの純粹培養で育てられたようだ。

セックスやイラマチオ、クンニリングスなどの知識はあっても、男の生理や男性器

の機能には疎いのだろう。

(驚いたな。想像力だけで、あんなエロい漫画を描いてたんだ)

何にしても、彼女が心の内に人並み以上の性的好奇心を溜めこんでいるのは間違いない。浩太はさらに腰を突きだし、したり顔でレクチャーした。

「しごくんだよ」

「……しごく?」

「チンポを手で軽く握って、上下にシコシコとこするんだ」

ぼかんとする知絵に胸を弾ませた少年は、囁れた声で追い打ちをかけた。

「く、口でしてくれてもいいよ。漫画に描かれていたようにさ」

血液が再び海綿体に流れこんでいく。

肉筒がピクリと反応したものの、浩太は即座に自制を試みた。

勃起してしまえば、知絵の次なる反応や行為が見られなくなる。

淫らな妄想を頭から無理やり追い払い、少年は三分勃ちの状態を維持させた。

優等生は身動きひとつせず、石のように固まっている。

どうしたらいいのか、逡巡しているらしい。やがて右肩が微かに動き、白い手がためらいがちに上げられた。

(おっ……ホントにやるつもりか)

花のつぼみを思わせる指先が、怒張にゆっくり近づいてくる。

浩太にとつても、性器を異性に触られるのは初めての経験なのだ。

いったい、どんな感触を与えてくるのか。

指が肉胴に添えられた瞬間、甘美な電流が脊髄を駆け抜け、少年は甲高い声をあげて腰を折り曲げた。

「あ、おとおおおおっ！」

突然の咆哮に仰天した少女が、慌てて手を引っこめる。

浩太は奥菌を食いしぼり、腰を震わせたあと、大きな吐息をこぼした。

「ご、ごめんっ。今度は……大丈夫だから」

「ほ、本当に……大丈夫なの？」

「ああ、触ってみて」

イニシアチブをとっている状況で、無様な姿は見せられない。

両足を広げて踏ん張り、全身の筋肉に力を込めれば、知絵は浩太の顔とペニスを交互に見つめてから再度右手を伸ばしてきた。

胴体に触れた指が、第二関節からそっと折り曲げられる。

ふっくらした指腹の感触に睾丸の中の精液が荒れ狂い、半勃ちのペニスでは自分の意思とは無関係にグングンと体積を増していった。

（あ、ああっ……委員長が、俺のチンポを握ってるっ！）

異様な興奮が迫りあがり、巨大な快感が股間で炸裂する。下手をしたら、このまま一気に射精を迎えてしまいそうだ。

（し、しっかりしろ！ この程度のことです暴発してたんじゃ、とてもレイプなんてできなぞっ！）

環奈と美貴子を陵辱するという大きな目的を思えば、堅物の委員長相手にこの程度の行為で放出するわけにはいかない。

浩太は顔面中の血管を膨らませ、何とか射精の先送りに成功させた。

3

知絵はひと呼吸置いたあと、怒張をしっかり握りこんだ。

真面目な優等生は今、何を思うのか。

真上から見下ろすメガネ越しの表情までは探れず、想像力が駆りたてられる。

「ゆつくりと……上下にしごいてみて」

裏返った声で告げると、知絵はペニスの先端に顔を向け、柔らかい指腹をゆつたり往復させた。

「く、く、くおっ」

剛直がしなり、弾けるような快感が背筋を這いのぼる。

（な、何だよ、これ。自分でするのと、感触が全然……違う）

温かい指の触れた箇所がジンジンと疼き、浩太はペニスが蕩けんばかりの悦楽に腰をよじらせた。

異性から性的な奉仕を受けるシチュエーションが、さらなる昂奮を喚起させているのかもしれない。

包皮が蛇腹のごとく上下し、亀頭冠がパンパンに張りつめていく。

少女は肉幹をしごきつつ、空いていた手を自身の胸元に添えた。

明らかに気持ち昂っているのだろう。優等生の初々しい反応も、童貞少年の射精欲求を頂点に引っ張りあげた。

「……あ」

指の動きが止まり、知絵が怪訝な顔つきに変わる。

宝冠部に目を向ければ、鈴口からとろりとした透明な粘液が滲みだしていた。

「カ、カウパー氏腺液だよ」

「カウパー氏腺液？」

「女もエッチな気持ちになると、濡れてくるだろ？ それと同じだよ」

少女は先端を物珍しげに見つめたあと、自ら指を前後にすべらせた。

（ん、むむっ……こいつ）

地味な優等生は、想像以上の性的好奇心に満ち溢れているらしい。喉をコクンと鳴らし、一心不乱に手コキを繰り返す。

徐々に抽送のピッチが増していくと、脳裏で白い光がチカチカと明滅しはじめた。

「くっ、くうっ」

このままの状態を続けられたら、間違いなく射精を迎えてしまう。

いつそ、顔面に牡の証をぶちまけてやろうか。

猛烈な淫情が逆巻くも、ガリ勉少女相手に簡単に放出してしまつては男がすたるという変なプライドもある。

この年頃の少年が皆そうであるように、浩太の関心はまだ見ぬ女の園一色に染まつていった。

手を伸ばし、バストにタッチすれば、ふんわりした感触が指先に伝わる。

(や、柔らかいっ！ それに、けっこう大きいぞっ!!)

男を惹きつける魅力はなくとも、知絵は真正銘の女なのである。

裸体を目にしたいた、女体の構造をじっくり観察したい。至極当然の欲求に衝き動かされた浩太は、小高い盛りあがりを手のひらで軽く揉みしだいた。

知絵は何の反応も示さない。猛り狂う牡の肉に全神経を注いでいるのか、無我夢中でペニスをこすりたてている。

それでもバストの頂点をまさぐれば、唇の隙間から、「あ、んっ」と甘い声を響かせた。

艶っぽいトーンが生身の女を意識させ、生真面目な少女がはつきりと性の対象物に変貌する。我慢の限界を迎えた浩太は、荒々しい息を吐きながら手コキを制した。

「た、立って」

「え？ あ……」

肩を鷲掴み、椅子から強引に立たせる。

床に転がり落ちるスケッチブックと鉛筆には目もくれず、小さな身体を抱えあげ、テーブルの縁に無理やり座らせる。

胸に合わさるやんわりしたバストが、牡の劣情をことさらあおった。

目を血走らせ、素早い動きでプリーツスカートの下に右手を潜りこませる。

「あ、やつ」

少女が小さな悲鳴をあげた直後、指先はパンティの中心部をとらえた。

恥丘の膨らみはこんもりと、えも言われぬ柔らかかみを伝えてきたが、少年は予想外の感触に目をひんむいた。

クロッチは熱い湿り気をはらみ、布地を通して淫らな粘液が指先に絡みついてきたのである。

(ぬ、ぬ、濡れてるっ！ 嘘だろっ!!)

優等生が手コキをしながら秘園を愛液まみれにさせていたという事実にも、理性が忘却の彼方に吹き飛んだ。

本能の命ずるまま、スリット沿いに指をすべらせる。

「やつ、やつ、やつ」

知絵は拒絶の言葉を発するも、その場から逃げだそうとはしない。自身の下腹部に顔を向け、弱々しい声をあげるばかりだ。

浩太は鼻の穴を目いっぱい開き、性感ポイントと思われる箇所を執拗になぞりつづ

けた。

それなりに気持ちがいいのか、小さな肉突起が布地に浮きだし、頬が赤く染まりだす。布地はいつの間にか、小水を漏らしたように濡れていた。

(こ、こいつ、ホントに処女だよなっ!!)

バージンの女が、これほどの量の愛液を垂れ流すものだろうか。

疑問が頭を掠めるも、今や知絵の顔は見るからに快楽に歪んでいた。

熱病患者さながら全身を小刻みに震わせ、前歯で下唇をキュッと噛みしめる。

華奢な顎を突きだしては、首筋から汗と甘酸っぱい芳香を立ちのぼらせる。

彼女の身体は火の玉のごとく燃えさかり、頬は完全に上気していた。

微かに開け放たれた唇のあわいから、湿った吐息が絶え間なくこぼれる。

女の色香を漂わせる少女にあてられた少年は、ついに野獣の牙を剥いた。

「み、見せろよ。ず、ずるいじゃないか。自分だけ、俺のを見て」

知絵は口を噤んだまま、何も答えない。

たとえ拒絶されたとしても、牡の性衝動はもう止められなかった。

「……あ」

スカートを捲りあげれば、ライトブルーと白のラインが入ったボーダー柄のパンテ

イが目を射貫く。

てつきり純白のパンティだと思っていたのだが、下腹部にびっちり張りついたセミビキニタイプの布地がさらに劣情を催させた。

（あ、ああっ、やばい！ おマ○コ見たい！ 触りたい、舐めたいっ!!）

昂奮に次ぐ昂奮が、牡の情欲を天井知らずに膨張させていく。

浩太はパンティの上縁から手を差し入れ、女の肉をじかに触感しようとした。

「や、や、やあっ」

知絵はさすがに腰をよじったものの、依然として強硬な拒絶は見せない。

これ幸いと手を奥に忍ばせれば、指先はシャリシャリした恥毛に続いて熱いぬめりをとらえた。

（お、おマ○コっ、おマ○コだっ!!）

ぐによぐによした肉帯が陰唇だろうか。

縦筋沿いのいちばん窪んだ箇所が、しつぽりとぬかるんでいる。

指を軽く折り曲げると、おびただしい量の花蜜がくちゅんと淫らな音を奏でた。

愛液の湧出は止まらず、秘裂から滾々と溢れ出ている。

おそらく、真面目な優等生はエロ漫画を描いているときから女の園を濡らしていた

のだろう。

そう確信した浩太はとぼ口を中指で攪拌し、人差し指を女肉に戯れさせた。

上方に突き出た小さな尖りをコリコリとあやした瞬間、知絵は腰を引き攀らせ、狂おしげに顔を歪める。

「あ、ンっ！ や、やぁぁンっ」

「何が、やぁんだよ。こんなに濡らしといて、スケベな女だな。他のクラスメートが知ったら、仰天するぜ」

「内緒に……内緒にして」

「それは、お前次第だよ。これからは、俺の言うことは何でも聞くんだからな。わかったか！」

恫喝すれば、知絵は泣き顔で頷く。

ここまで来たら、約束や交換条件など知ったことではない。

目の前の女はマゾヒストであり、いたぶられて快感を覚える女なのだ。それが証拠に、嗜虐的なセリフや行為を繰り返すたびに、彼女はひと際荒い吐息を放ち、頬を瞬時に紅潮させていた。

首筋はすっかり汗ばみ、乙女のフェロモンが鼻先にぶんぶん香ってくる。

浩太は中指を膣から抜き取り、揃えた二本指で女肉の花をこすりあげた。

「あつ、だめっ！」

少女は身体を強ばらせ、自身の下腹部を切なげに見下ろす。

かまわず指の抽送を速めれば、ヌルヌルの花蜜が絡みつき、股の付け根から淫らな擦過音が響き渡った。

「ンっ、ンっ、ンっ」

「何だよ、この音」

「あつ、あつ」

「聞こえてんだろ？ 委員長のおマ○コから洩れてんだぜ」

「はっ、ううううっ」

知絵は顔を背けたものの、湧出しつづける愛液が指のスライドをよりスムーズにさせる。

今や肉擦れ音はぐちゅんぐちゅんと、濁音混じりの音色に変わっていた。

クリトリスも陰唇も心なしか肥厚し、とろみの強い淫蜜が指腹にまとわりつく。

（こいつ、絶対にオナニーしてるよな！）

勉強ひと筋と思われた優等生がエロ漫画を描き、淫らな妄想を働かせては自慰行為

に耽っているのだから、人間という生き物はわからないものだ。

学園一のマドンナも、一人遊びに興じているのだろうか。

知絵の顔が環奈に取って代わり、淫猥な想像力がさらに駆りたてられる。

(やってやる！ 環奈ちゃんの処女を絶対^に奪ってやるっ!!)

浩太は尻を吊りあげ、肉豆を指腹でグリグリとこねまわした。

「ひっ！」

少女が小さな悲鳴をあげ、腰を前後にわななさせる。そして身を反らしたあと、テーブルに仰向けの体勢で倒れこんでいった。

(あれ？ ひよっとして……)

指の動きを止めて顔を覗きこめば、うっとりした表情に見える。

(イッた！ イッたんだっ!!)

指技で絶頂まで導いたという事実は、童貞少年に大きな自信と勇気を与えた。

夏合宿までに綿密な計画を立て、何としてでも学園のマドンナと美人教師に男の尊厳を見せつけたい。

邪悪なエネルギーが猛烈な勢いで膨れ上がり、内から性的好奇心がほとばしる。

浩太はスカートをたくしあげ、鼻息を荒らげながらパンティのウエスト部に両手を

添えた。

快樂の余韻に浸っているのか、知絵はピクリとも動かない。

チャンスとばかりに、セミビキニの布地を引き下ろしていく。

心臓がドラムロールのごとく鳴り響き、ペニスが痛みを感じるほどいなないた。

生の女性器を目にするのは、初めての経験なのである。

脳細胞が歡喜の渦に巻きこまれ、性欲本能だけに衝き動かされた。

（あ、あ、慌てるな。相手は、環奈ちゃんでも先生でもないんだから！）

気持ちを落ち着けようとしても、脳漿は煮え滾り、全身の血も逆流している。

浩太は乙女の花園から意識的に視線を外し、パンティをスルスルと引き下ろしていった。

ぐっしよりと濡れた布地を足首から抜き取り、テーブルの上に放り投げる。

生唾を飲んでから、期待に満ちた目を恥丘の膨らみに向ける。

（ああ、お、おマ○コだあ）

こんもりした肉の丘は、蒸かしたてのおまんじゅうを連想させた。

柔らかな繊毛がけば立ち、閉じられた足の付け根から縦筋が微かに覗いている。

ガリ勉の優等生は、予想以上に肉感的な腰つきをしており、豊かなバストと同様、

むちむちした内腿の柔肌が猛烈なセックスアピールを感じさせた。

白いなめらかな肌は、さすがに十代の少女だ。きめが細かいうえに一点のシミもなく、瑞々しい弾力を余すことなく見せつけていた。

やがてすべての関心が女芯に注がれ、荒々しい欲望を抑えられなくなる。

浩太は膝に両手をあてがい、やや緊張の面持ちで左右に割り開いていった。

(あ、あ……こ、これが、おマ○コっ)

ぱっくり開いた膣口はダイヤの形に広がり、ゼリー状の内粘膜を剥きだしにさせている。

陰唇の上部は厚みこそあったものの、インターネットで閲覧した女性器と比較すると、全体的に小振りだろうか。

二本の肉帯は下方に向かうにつれて細くなり、膣の中に巻きこむようなかたちで続いていた。

クコの実を彷彿とさせる小さな肉芽。朝露に濡れた花びらのごとく、ふしだらな粘液にまみれた恥芯。女子高生だけあり、色素沈着やくすみはいっさいない。

ベビーピンクの陰唇とコーラルピンクの膣内が凄艶なコントラストを見せつけ、浩太の男を嫌というほど奮い立たせた。

美しいとは思えない造形なのに、なぜこんなにも胸が締めつけられるのだろう。何気なく顔を近づけた瞬間、南国果実の芳香が鼻腔粘膜をくすぐった。

体臭、汗、皮脂の匂いに獣じみた媚臭が混じり、強烈な臭気と化して立ちのぼる。

この年頃の少女は新陳代謝が激しく、匂いも濃厚なのだが、その知識のなかった浩太は目を剥いて鼻をひくつかせた。

(環奈ちゃんも美貴子先生も、こんな匂いがするんだろうか?)

三角州にこもった牝のフェロモンは、熱化した空気とともにムンムンと放たれ、交感神経を遠慮なく刺激した。

決して香氣とは言いがたいのだが、恥臭を嗅いでいると、なぜか狂おしい気持ちになり、いても立つてもいられなくなる。

「はあはあはあっ」

目を据わらせた少年は、迷うことなく女肉にかぶりついていった。

舌先を跳ね躍らせ、秘裂に唇をすべらせては恥肉の感触と味を堪能する。

「……あ」

正気を取り戻したのか、少女の声が鼓膜に届くも、浩太はおかまいなく女芯を舐りあげていった。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>

二次元ドリームノベルズ

夢幻姫姫
S.E.N. コスプレ

とろ蜜美女めぐりの
桃色バスツアー

日常に密着したエロス、
リアルな舞台設定で送る
官能小説レーベル！

リアルドリーム文庫

戦うヒロインを屈辱させてあげる
かなり過激な
陵辱系ライトノベル！

フリィダム120%!?
ジャンルにこだわらない
ドキドキ×ラブ！

呪詛喰らい師

あとみっく文庫

キルタイムコミュニケーション小説シリーズ

あなたはどのタイプ？

二次元ぷち文庫

新装版
姫騎士

あの人気作品の
外伝作品もあり！
電子書籍しつこめなエッチノベル！

姫騎士 クラズメイト！

ビギニングノベルズ

小説家になろうの男性向けサイト
から書籍化！

二次元ドリーム文庫

ドキドキクラブな
ハーレム系
ライトノベル！

異世界
で生きる
妹は
可愛い？